奈文研ニュース

No.53 JUNE.2014

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市佐紀町247番1
http://www.nabunken.jp/

埋蔵文化財センターの40年と今後

わが国では、昭和40年代に入ると高度経済成長にともなって大規模な建設や開発が各地で始まり、多くの遺跡が破壊の危機に直面するようになりました。しかし、当時は地方公共団体の考古学専門職員はわずかで、これらの事業に先立って遺跡の発掘調査をする体制は、まだ整備できていませんでした。このような状況を打開するために、①地方公共団体のおこなう発掘調査や遺物整理・保存にかんする技術の指導と援助、②地方公共団体の発掘担当者に対する技術研修、③埋蔵文化財にかんする情報の共有・公開、以上の役割を担う組織として、1974年4月に奈良文化財研究所に埋蔵文化財センターが設けられたのです。

当初3室6人で発足した埋蔵文化財センターは、1983年には8室まで規模が拡大し、2001年の独立行政法人化にともなって7室体制となり、さらに2006年の組織改変で情報と国際関係の事業が新設された企画調整部へと移りました。以後、遺跡・調査技術研究室、保存修復科学研究室、年代学研究室、環境考古学研究室の4室からなり、考古科学の研究とその成果の活用を中心的な事業とする組織となっています。

社会情勢の変化にともなって埋蔵文化財センターの組織と求められる業務は変化してきましたが、今、喫緊の課題となっているのは東日本大震災に関連する事業です。震災直後には、保存修復科学研究室が中心となって、被災文化財のレスキュー活動と応急処理が迅速に実施されました。そして、現在は復興事業にともなう発掘調査への協力に、震災関連事業の重点は移っています。遺跡・調査技術研究室の持つ遺跡探査技術や三次元レーザースキャナー・写真計測による遺構の記録化技術は、東日本大震災にともなう発掘調査の迅速化に貢献しています。また、環境考古学研究室は、震災復興事業にともなう発掘調査で貝塚等から出土する動植物遺体の調査協力に活躍しており、調査のマニュアル『現場のための環境考古学』(埋蔵文化財ニュース155)を作成し配布しています。そして、今年度からは、遺跡・調査技術研究室を中心に、遺跡で検出された災害痕跡のデータベースの作成と公開を新たな事業として始めました。これは、災害の古記録や遺跡で確認できる災害痕跡を、巨大地震や津波の予知に活用するという国の施策にもとづいて実施するもので、その成果が期待されています。

このように、埋蔵文化財センターの活動は、発足当初から一貫して国の文化財行政と密接に結びついてきました。しかし、その時々の社会的要請に適宜対応するためには、基礎的な研究の充実が重要となります。たとえば、年代学研究室の様々な樹種について暦年標準パターンを作る研究、環境考古学研究室の現存動物の骨格標本を収集し公開する活動等は、地味ではありますが奈文研でしかできない事業です。

この春、埋蔵文化財センターは開設40周年を迎えましたが、今後も、文化財科学の発展とその成果の社会への還元を目標として、柔軟かつ積極的に活動していきたいと考えています。

(埋蔵文化財センター長　難波 洋三)

特別研修の様子(土層転写課程　1985年)

発掘調査の概要

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第180次）

檜隈寺は渡来系氏族である東漢（やまとのあや）氏が7世紀に建立したとされる古代寺院です。檜隈寺周辺を含めて計画された国営飛鳥歴史公園（キトラ古墳周辺地区）の整備事業にともない、奈良文化財研究所が国土交通省の委託を受けて2008年度から発掘調査を継続的に実施しています。

今回は檜隈寺金堂南側の丘陵上と、南東の丘陵斜面をその下部まで295㎡を発掘調査しました。檜隈寺周辺では、北・東側で古代の遺構が多くみつかっているいっぽう、南側の状況は良くわかっていません。今回の調査の主な目的は、回廊東南隅の状況や金堂南側の遺構の確認でした。

調査の結果、金堂南側の丘陵上や斜面下部では主に中世初頭の掘立柱建物や土坑・溝を、斜面中腹では古代の掘立柱建物・塀を検出しました。この地域は中世以降には水田化しますが、その過程で丘陵頂部の古代の遺構は回廊の一部を含めて削平され、中世以後の遺構が残されていきます。檜隈寺では平安時代後期頃、木塔跡に十三重石塔が建立され、講堂基壇の改修がおこなわれていることがわかっています。今回の中世の遺構も、この時期の檜隈寺の利用状況を示すものとして重要でしょう。

また、丘陵中腹には削平がおよんでいない場所があり、そこには古代に地山を削って平坦面をつくり、建物や塀を建てていたことが判明しました。一部の遺構は調査区外に延びています。こうした知見は、檜隈寺の南側において古代の遺構がどのように展開していたかを知る貴重な手掛かりとなるものです。

（都城発掘調査部　森先 一貴）

丘陵中腹での古代の建物と塀（東から）

平城京左京三条一坊一坪の調査（平城第522次）

平城京左京三条一坊一坪は、平城宮朱雀門の東南すぐに位置します。ここに国土交通省による平城宮跡展示館の建設が計画され、事前調査として奈良文化財研究所が2010年度より継続的に発掘調査をおこなっています。

これまでの調査により、この坪は、平城京遷都前後のわずかな期間を除き、構造物があまり存在しない広場的な空間として利用されていたことが判明しています。今回の調査は、一連の調査の最後のものとして、坪の東端に近い箇所に東西21m×南北93mの調査区を設定しておこないました。

調査区北端から遺構検出を始め、南へと作業を進めていったところ、調査区北部では数棟の建物跡が見つかりました。しかし、北側三分の一を過ぎると、顕著な遺構がほとんど認められなくなりました。構造物が少ない広場的空間という坪の様相が、改めて確かめられたのです。

遺構の乏しさが既往の知見を裏づける成果になるとは楽な調査だ、と思われるかもしれません。しかし、実際は、地面を睨みつけては神経ばかりをすり減らす調査でした。遺構が《ある》ことより、《ない》ことを証明する方が難しいものです。もしも、何か重要な遺構を見落としていたら――調査中はそんな恐怖におののく日々だった、とは少し大袈裟すぎるでしょうか。

もちろん調査には万全を期しており、この坪の遺構密度が低いことは疑いありません。官人の宅地としての性格を基本とする平城京で、坪全体を広場として確保する事例は珍しいものです。一連の調査により、平城京における土地利用の多様さの一端があきらかとなりました。

（都城発掘調査部　山本 祥隆）

調査区全景（北から）

第一次大極殿院の調査（平城第520次調査）

大極殿院は天皇の即位や元日朝賀等、国家的儀式をおこなった場所で、古代都城のなかでももっとも重要な空間です。平城宮の大極殿院は、奈良時代前半には中央北側に造られ、後半には東の区画に移ります。この2つの大極殿院をそれぞれ第一次大極殿院、第二次大極殿院と呼んでいます。奈良時代の後半には、第一次大極殿院の区画は、「西宮」という宮殿として整備され、のちに称徳天皇が内裏として使用しました。平安時代初期には平城太上天皇によって再整備され、居所として用いられたとされています。

奈良文化財研究所は1959年以来、第一次大極殿院の区画の東半分と回廊部分を中心に、継続的に発掘調査を実施し、遺構の全容を解明してきましたが、儀式等、当時の具体的な様相を知る十分な手がかりはこれまで得られませんでした。

今回の調査地は大極殿の正面で、調査面積は476㎡、期間は2014年1月7日から3月19日です。3月8日には現地説明会を開催し、寒い中、700名以上の方々に足を運んでいただきました。

主な調査成果は、奈良時代後半の元日朝賀の際に立てたとみられる宝幢・四神旗（以下、幢旗とします）の遺構です。その特徴とともに、遺構を幢旗と判断するにいたった経緯を述べたいと思います。

幢旗とみられる遺構は、東西に長い楕円形の巨大な柱穴で、過去の調査とあわせて、7つの柱穴が約6.0m（20尺）等間で並び、これが南北2列あります。今回の調査で、それぞれの柱穴には3本の柱が立つことがあきらかとなりました。

平安時代に編纂され、法令細則を記した『延喜式』によると、元日朝賀には、大極殿から見て、中央に烏形の幢、左（東）側に日像の幢、朱雀・青龍の旗、右（西）側に月像の幢、白虎・玄武の旗、合計7本の幢旗を立てるとされています。また、幢旗の柱の相互間隔は「二丈」（6m）と定められています。これらの幢旗の数、相互の間隔は、今回の成果にピタリと一致します。また、『続日本紀』によると、大宝元年（701）の元日朝賀の際に、藤原宮で同様の7本の幢と幡（旗）を立てており、奈良時代には幢旗を用いる儀式が成立していたと考えられます。

時代は下りますが、幢旗は「文安御即位調度図」（12世紀）に描かれており、中央の柱と2本の脇柱を持つ構造で、高さは約「三丈」（9m）とされます。この3本セットの柱も、遺構の特徴と合致します。

また、元日朝賀は大極殿院で執りおこなうのが通例ですが、『続日本紀』によると、西宮でも、天平神護元年（765）に称徳天皇が朝賀を受けており、神護景雲3年（769）に法王であった道鏡が大臣以下の拝賀を受けています。

このように、今回、検出した遺構は文献・絵画資料にみられる幢旗の特徴と一致する点が非常に多いことから、2時期分の幢旗の遺構と考えられます。

西宮における重要な儀式の様相を考古学的に裏付けられたことは、平城宮あるいは古代の宮殿の実像を解明する上で大きな成果です。そして、今日まで文献・絵画資料が伝えてきた幢旗とリンクした遺構を目前にすると、過去の人々の想いとありし日の姿が想像されます。

（文化遺産部　海野 聡）

２列に並ぶ幢旗の遺構（東から）

巨大な柱穴と３本の柱抜取穴

日光男体山頂遺跡出土鏡（右手前の円鏡が原寸大）

日光男体山頂遺跡出土鏡の調査

鏡、と言えば姿を映すものですが、ガラスで作られ始めたのは明治時代のこと。それまでは、弥生時代から江戸時代にいたるまで長きにわたって、青銅で作られていました。青銅で鏡の役割を果たすのか？と思われるかもしれませんが、光沢のある金属板に姿を移せば、色はともかく形は映りますよね。

ここに所せましと敷き詰められているのは、古墳時代から鎌倉時代前期にかけての鏡。これらはすべて栃木県日光市にある男体山の山頂から発見されました。姿見が大量廃棄されたのではなく、どうやら霊峰の山頂を目指した修験者たちが鏡をまじないの道具として携え、山頂で奉賽（ほうさい）したようなのです。鏡の年代を調べると、平安時代のものが172面と多く、奉賽がこの頃もっとも盛んだったとわかります。全国でこれほど平安時代の鏡が出土した遺跡はほかにありません。

奈良文化財研究所では、2013年度にこれらの鏡の製作技法や化学組成について悉皆調査をしました。これによって未だあきらかにされていない製作地や流通経路、男体山に鏡が集中して奉賽された理由等の解明につなげたいと考えています。

（企画調整部　中川 あや）

『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧Ⅱ』の刊行

現在のところ、日本全国から389,357点の木簡の出土が報告されています。今年２月に刊行した、『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧Ⅱ』（埋蔵文化財ニュース154号）にちなんで、10年ぶりに集計されました。１冊目の『綜覧』（2004年２月）には、311,184点の情報を収めていますから、この10年で78,000点余りの木簡が出土し、あるいは公表されたことになります。

木簡の出土点数の増加に対応する形で、木簡が出土した遺跡の数も増えています。この10年で、遺跡の数は975から1,378へと、およそ1.4倍に増加しました。その多くは、中世、近世、あるいは近代という、新しい時代の遺跡から出土しています。古代には限らない、木簡＝「文字のある木製品」という広い定義が、定着しつつあるといえるのかもしれません。

『綜覧Ⅱ』は、全国の発掘調査機関、大学等の研究機関、公立図書館等の公的機関のほか、木簡を調査されている全国の調査担当者の方や研究者等1,000名余りに配布されました。現在、公開中のデータベース更新にむけた作業をおこなっています。

先日、本書を手にしたある図書館司書の方から、「似たようなタイトルが多く、書架に並んでいても探しにくい（報告書を）検索するレファレンスツールが充実」したという、ご意見をいただきました。木簡のナショナルセンターとしての奈良文化財研究所は、調査・研究の世界のみならず、社会教育の現場からも期待されているようです。

（都城発掘調査部　山本 崇）

10年ぶりに刊行した綜覧

高松塚古墳　墳丘断面の展示

飛鳥資料館の新たな常設展示として、高松塚古墳の墳丘断面を公開しました。実際の土層の表面に布を接着して、薄く剥ぎ取って標本としたものです。

高松塚古墳の壁画を生物被害等から守るため、2006～07年に石室解体事業が実施されました。墳丘中心部を発掘調査しながら掘り下げて石室を露出させる作業は、奈良文化財研究所が中心となっておこないました。その過程では図面や写真等の記録とともに、このような実物資料も保存したのです。

高松塚古墳は上段直径17.7m、下段直径23mを測る二段築成の円墳です。墳丘は、石室を構築しながら土まんじゅう状に盛り上げる下位版築と、遺骸を納めて石室を閉塞した後にさらに盛り上げる上位版築の大きく二段階にわけて構築しています。版築とは土をつき固めて３～５㎝程の層を積み重ねていく土木工法で、密度の高い丈夫な盛土をつくることができます。

ここに展示したのは、下位版築の東西断面から得た標本です。版築は90層程あり、粘土質の赤い層と砂質の淡色の層を交互に積み重ねていること、特に強度が高い最下部の版築は土の色も異なること、凝灰岩の粉末が混じっていること等がわかります。また、大地震で墳丘に生じた亀裂が版築層を貫いて縦方向のシワのようにみえています。

今回展示した墳丘断面は、終末期古墳の精緻な版築の例として学術的にも貴重です。また、高松塚古墳の石室周辺の版築層は解体にともないすべて掘削せざるをえなかったので、限られたものながら、高松塚古墳中心部の墳丘構造そのものを後世に伝える希有な資料でもあります。　（飛鳥資料館　石橋 茂登）

展示の様子。土層は実物、中心の石室は模造。

薬師寺東塔保存修理工事への奈文研の参画

奈良市西ノ京に所在する薬師寺の東塔では2009年度より10カ年の計画で保存修理事業がおこなわれています。奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所が、薬師寺より受託し実施するものです。建造物研究室では、解体工事が始まった2012年度より毎年、研究員１名を派遣しています。

天平２年（730）に現在の地に建てられた東塔は、同じく奈良時代前半に建てられた平城宮第一次大極殿、大極殿院の復原にあたっても、大いに参考にしています。その構造や意匠が、ほかの奈良時代の建築と大きく異なることから、藤原宮の南に位置する本薬師寺から移築したものか、否かという論争が、明治以来続いています。建造物の修理にあたっては、構造耐力を担保する必要があり、東塔では特に相輪や基壇にかんして、対策が求められており、美術工芸品、史跡といった文化財の保護の枠組みにも話はおよびます。

これらの難問解決のため、建造物研究室からの研究員派遣以外にも、多くの調査・研究に奈良文化財研究所が参画しています。埋蔵文化財センターの年代学研究室が年輪年代測定等を受託しているほか、同保存修復科学研究室、遺跡調査・技術研究室の各室が、相輪、塗装・彩色、三次元計測にかんして協力しています。これらは、いずれも新しい調査研究方法により東塔に迫るものです。木部の解体を終えた後には、都城発掘調査部が橿原考古学研究所と共同で基壇の発掘調査に臨みます。多分野の研究者が集まる奈文研だからこそ、可能な文化財の総合的な調査・研究といえるでしょう。

（都城発掘調査部　鈴木 智大）

解体がすすむ薬師寺東塔（二重裳階腰組）

記念座談会「いにしえの技術を語る―現代の「匠」と考古学者―」の開催

飛鳥資料館では、特別展ごとに記念講演会を開催しています。春期特別展「いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代―」では、少し趣向を変え、考古資料の復元製作でも著名な「現代の匠」と奈良文化財研究所の考古学者が古代の技術について語り合う記念座談会「いにしえの技術を語る―現代の「匠」と考古学者―」を、５月11日（日）に開催いたしました。陶芸作家の脇田宗孝先生（奈良教育大学名誉教授）、鋳金作家の小泉武寛先生（和銅寛）の２人の現代の匠を迎え、奈文研からは松村恵司所長、玉田芳英都城発掘調査部副部長が参加しました。

座談会では、脇田先生、小泉先生より暗文土師器（あんもんはじき）・施釉陶器（せゆうとうき）・富本銭等の復元品の製作工程や、それにまつわる様々な工夫やエピソードが紹介されました。また、脇田先生と小泉先生の対話から、燃料を用いて温度をコントロールする方法や土をあつかう技術が重要であること等、窯業技術と鋳造技術の共通点も浮かび上がりました。松村所長からは、飛鳥池工房遺跡出土の富本銭とその鋳型や未製品の特徴とともに、小泉先生と共同研究として実施した富本銭鋳造実験の意義が述べられました。さらに土師器の暗文の施文方法をめぐり、小石を用いて復元製作をおこなった脇田先生に対し、玉田副部長からは出土した暗文土師器にはヘラ状の工具で施文した痕跡があることが指摘される等、現代の匠と考古学者の製作技術に対する意見の違いもあきらかになりました。

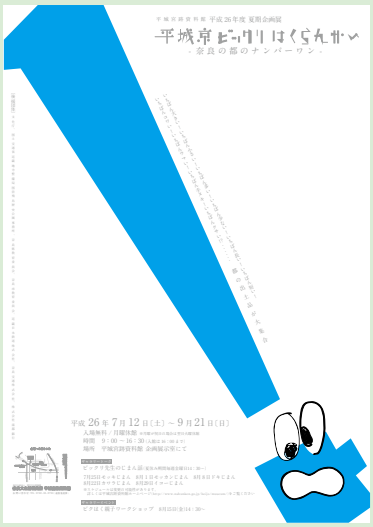
現代の匠と考古学者の対話は２時間近くにもおよび、多くの参加者が熱い議論に耳を傾けました。

飛鳥資料館ではこれからも、展覧会とともに、講演会や様々なイベントの開催を予定しています。どうぞご期待ください。

（飛鳥資料館　丹羽 崇史）

記念座談会の様子

平城宮跡資料館 夏期企画展
「平城京ビックリはくらんかい―奈良の都のナンバーワン―」



今年の夏、平城宮跡資料館では、平城宮や平城京跡から出土した、よりすぐりの出土品を集めた「ビックリはくらんかい」を開催します。

いちばん大きい瓦、いちばん小さい土器、いちばん長い木簡、いちばん多く書かれた文字、さらにはいちばん臭いそうな土器、いちばん面倒くさい木簡、いちばん手抜きな瓦などなど…。様々な「いちばん」の特徴をもつものを一堂に集めました。

会期中、夏休み期間の金曜日には、子ども向けの楽しい講座やワークショップを開催予定です。ぜひ、お子様・お孫様と一緒におこしいただき、1300年前のナンバーワンの品々にビックリしてください。　（企画調整部　中川 あや・渡邉 淳子）

会　　期：2014年7月12日（土）～9月21日（日）
（月曜休館、月曜祝日の場合翌日休館）
開 館 時 間：9：00～16：30（入館は16：00まで）
ギャラリーイベント：ビックリ先生のじまん話やワークショップ
7月25日、8月1・8・15・22・29日（いずれも金曜日）14：30～
ホームページ：http//www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

飛鳥資料館　夏期企画展　第５回写真コンテスト「飛鳥の甍」

飛鳥の甍―小山の民家

写真集『飛鳥』

飛鳥資料館では2011年度から写真コンテストを開催し、今年の春には万葉の原風景を写した受賞作をまとめた写真集『飛鳥』も発行しました。今回は、「飛鳥の甍（いらか）」をテーマに、瓦の美しさや古の甍をイメージさせる写真を募集します。

飛鳥では、甘樫丘から遠望する飛鳥の集落の家並みや、古からの法灯を受け継ぐ寺院等、美しい瓦葺きの屋根―甍―をいたるところで目にします。瓦が日本で初めて葺かれたのは飛鳥の地でした。崇峻天皇元年（588）、百済から渡来した瓦博士が飛鳥寺の創建に参加し、瓦葺きの伽藍が完成します。それから1400年余り、古代の伽藍や宮殿跡には自然の草花が生い茂り、その傍らには、近世から現代にかけての瓦葺きの建物が軒を連ねています。

ぜひ飛鳥におこしいただき、初夏には写真撮影、盛夏には写真展をお楽しみください。会期中には写真教室も開催します。　（飛鳥資料館　西田 紀子）

応 募 締 切：2014年7月12日（土）必着
写真展示期間：2014年7月25日（金）～9月7日（日）（月曜休館）
開 館 時 間：9：00～16：30（入館は16：00まで）
写 真 教 室：7月25日（金）14：00～、8月23日（土）14：00～
事前申込制、申込方法等詳細はホームページ、チラシをご覧ください。
お問合せ・応募先：〒634-0102　奈良県高市郡明日香村奥山601　飛鳥資料館　写真コンテスト係（☎0744-54-3561）
ホームページ：http://www.nabunken.go.jp/asuka/index.html

■　お知らせ

平城宮跡資料館夏期企画展
2014年７月12日（土）～９月21日（日）
「平城京ビックリはくらんかい
―奈良の都のナンバーワン―」

飛鳥資料館夏期企画展
2014年７月25日（金）～９月７日（日）
第５回写真コンテスト「飛鳥の甍」

第115回公開講演会
2014年10月４日（土）　於：平城宮跡資料館

特別講演会（東京会場）
2014年10月25日（土）　於：有楽町朝日ホール

■　記　録

文化財担当者研修
○建築遺構調査課程
2014年６月９日～13日　9名
○植物遺体調査課程
2014年６月16日～20日　10名

飛鳥資料館　春期特別展
2014年４月25日～６月15日
「いにしえの匠たち
―ものづくりからみた飛鳥時代―」
10,597名

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp/
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2014年6月